



## 聖家族 (マタイ 2:13-15,19-23)

エジプトからイエスが両親を渡らせた

聖家族の祝日です。イエスを迎え入れたヨセフとマリアが聖家族の姿です。私たちも家族の中にイエスを迎え入れることで、聖家族に近づくことができます。

鯛ノ浦から、「かんころ餅」が届きました。結構な本数でした。どんな品物でも、ある程度の本数で届くと風邪を引くようです。鯛ノ浦から届いた「かんころ餅」も、「ゴホンゴホン」と言っておりました。

今日は日曜日でありながら「祝日」です。一般に日曜日は「主日」と呼ばれますが、実際の典礼は理屈よりもっと面白く、理屈っぽくありません。ついでですが、神の母聖マリアのあとに祝われる「主の公現」は、日曜日に祝われていながら「祭日」であります。大勢の皆さんには気にするほどのことでもありませんが、気にする人もいるようなので並べてみました。

さて 29 日 9 時のミサで、亡くなっている田平教会歴代主任司祭、田平教会出身司祭、修道者、教会建設で命を落とした功労者のために祈っておりますが、教会新聞「瀬戸山の風」でクイズを出しておきました。百周年記念誌をよく見てみると、田平教会出身の亡くなった神父様の一人は、百周年記念誌の通りであれば私より一年あとに司祭に叙階されたこととなります。

もちろん間違いを見落としているのですが、間違いに気づいた記念誌作成に携わっていない一般の方がおられましたら、主任司祭に声かけしてください。商品券をお渡しします。一応、20 枚用意していますので、気づいた人は早めにお知らせください。記念誌編集にたずさわった人や、百周年の実行委員会メンバーは、見つけても商品券はあげることができませんのでご遠慮ください。

さて、亡くなられた諸先輩を思い浮かべる時、諸先輩方が肌身離さず持っていたものは何かと考えました。亡くなるにあたってはさまざまなものを手放さなければなりません。神様は幸いに両手をお与えくださって、両手で何か一つくらいは肌身離さず持って神様のもとへ行けるようにしてくださいました。何を最後まで握りしめていたのでしょうか。

それは、イエス・キリストだったのではないかと思います。どんな人でも人生の最後にあれもこれも持って旅立つことができないことは分かっていますが、それなのに持っていても仕方のないものや、持っていくべきでないものにすがりつくこともあるわけ。そんな中で、ミサの意向に加えた諸先輩方は、イエス・キリストだけを、肌身離さず持って、旅立っていったわけです。

イエス・キリストを抱いて旅立つ人は、きっと生きていた間もイエス・キリストがより頼むのに値するお方だと理解して生きていたことでしょう。イエス・キリストと縁遠い生活をしている人が最後だけイエス・キリストを抱きしめるとはとても思えないからです。どんな思いでイ

イエス・キリストに自分を委ねて生きたのか、本人にしか分かりませんが、今日の福音朗読は、私たちの先輩方の思いを理解させる鍵になると思います。

本日の朗読箇所は、ヨセフを通して明らかにされた神の計画を紹介しています。主の天使が夢でヨセフに現れ、「エジプトへの避難」と、「エジプトからの帰国」に聖家族を駆り立てます。ヨセフには時間が与えられませんでした。何も持たずに、行動したのです。二度とも「起きて、子供とその母親を連れて・・・」と命じられていますから、あえて言えばイエスを抱きかかえてエジプトに逃れ、イエスを抱きかかえてエジプトから帰国したのでした。

エジプトでの生活がまったく見通せなかったにもかかわらず、イエスを抱きかかえていた聖家族は困難な生活を乗り越えました。エジプトから帰国する時、ヘロデの子アルケラオが引き続き命を狙う可能性があったのに、イエスと一緒にあった聖家族はナザレで生活し始めます。何も見通せなくても、危険のさなかにあっても、イエスを受け入れた家族は常に守られ、導かれていくのです。

私たちが聖家族に近づくために必要なことがこれで見えてきました。聖家族はイエスを腕に抱く家族です。聖家族はイエスを家庭に受け入れた家族です。イエスを腕に抱いたまま、自分優先の生活はできません。イエスが家族の中にいて初めて自分の家族は成り立っている。そう理解できるようになった時、私たちの家族は聖家族に近づいていきます。

先が見通せない時、腕に抱きかかえたイエスを地面に置いて、両手を使って自力で道を開こうとしますか？イエスと共にいない未来を切り開いて何になるのでしょうか。危険のさなかで、イエスを脇に置いて自力で安全を確保しますか？イエスに守ってもらえない安全に、何か意味があるのでしょうか。聖家族に近づけば近づくほど、私たち神の家族はこのように考えるはずなのです。

もう一度、聖家族の前に家族で身を置きましょう。私たちは聖家族を遠ざけて生活を確認できるかどうかを。答えをはっきり示してもらったなら、正直にその答えに沿って歩きましょう。一人ひとりの人生、家族の未来、教会家族の未来も、聖家族に近づこうとするかどうか、最初の一步がかかっているのです。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)